

2018年度 京都大学医療系一回生対象  
早期体験実習 報告書

京都大学医学部医学科・人間健康科学科

京都大学大学院薬学研究科



2018 年度 京都大学医療系 1 回生対象 早期体験実習・報告書

もくじ

1. はじめに -----	2
2. 早期体験実習の目的と概要 -----	6
3. 学生による実習プログラム評価 -----	8
4. 学生は何を学んだか -----	13
5. 医療者から学生へのメッセージ -----	22
6. 受け入れ医療機関からのフィードバック -----	24
7. 事後ワークショップ -----	27
8. 付録 -----	30
• 受け入れ医療機関一覧	
• 実習例	
9. 編集後記 -----	34

# 1. はじめに

早期体験実習 I は、京都大学医学部医学科・人間健康科学科・薬学部の一回生が参加する多職種連携教育として 2013 年度にスタートしました。今年度も、医療機関及び医療者の皆様のご協力の下、学生たちは未来の医療者の土台形成につながる体験をさせていただきました。お世話になった皆様に、心より感謝申し上げます。

実習に伺う学生たちは入学したばかりで、医療についての知識・経験はほとんどありません。優秀な成績で入学しても、「将来どのような医療者を目指すのか」「何のために大学で勉強するのか」などの点で戸惑いを覚えている場合も少なくありません。そこで学生には、医療現場や医療プロフェッショナルたちの仕事に触れることを通して、医療者としてのやり甲斐だけでなく厳しさも理解し、今後の学部生活でどのような医療者を目指し、何を学ぶべきかをしっかりと掴んでほしいと考えております。

早期体験実習では、①自分の目指す医療者への理解、②医療での多職種連携への理解、③患者の視点からの医療への理解の三点を柱としています。本実習は、学生にとって「高校生」から「医療専門職者の卵」への第一歩となるものと期待しています。

本誌にてご覧いただけるように、様々な点で未熟な新入生と真剣に向き合って下さり、きめ細やかなご指導をしていただきました。皆様のご協力を、改めて深く感謝致します。

2019年3月1日

京都大学医学教育・国際化推進センター

小西靖彦

医学部人間健康科学科の学生を、今年度も早期体験実習に受け入れて下さり、誠に有り難うございました。お世話をいただいた医療機関の皆様、医学教育・国際化推進センターの小西靖彦先生はじめ関係者の皆様に御礼を申し上げます。

医学を学び始める時期での早期体験実習は、学生の皆さんの心に、強い印象を残したと思います。実際の医療現場を体験させていただいたことが、これから学んでいくことの動機づけとなり、将来自らが目指す医療人について考える機会になることを期待しております。

医療現場での実習後は、医学部医学科・薬学部と合同で、学生版多職種カンファレンスとも言える「事後ワークショップ」を開催いただきました。自らの体験を、他の職種を目指す学生と語り合うことで、視野と人間関係を広げる大変よい機会になったと思います。

学生の皆さんが、他では得がたい貴重な体験をさせていただいたことを、本誌を拝見して改めて強く感じました。このような機会を実現いただきました関係各位に、心より御礼を申し上げます。

2019年3月1日  
人間健康科学科長  
澤本伸克

京都大学薬学部では、早期体験実習の一環として、1年次夏季に「多職種連携医療体験実習」を実施しています。

「多職種連携医療体験実習」では、以下の3つの目的を掲げています。

1つ目は、外来ボランティア等、病院スタッフとしての実際の仕事にかかわりながら、患者とコミュニケーションをとり、患者の視点から見た医療、病院とは何かを理解することです。これから薬剤師や創薬研究者のリーダーとなるために、挨拶やコミュニケーションの重要性を知ると共に患者サイドの立場に配慮できる心を養い、医療人としての自覚を高められることを期待しています。

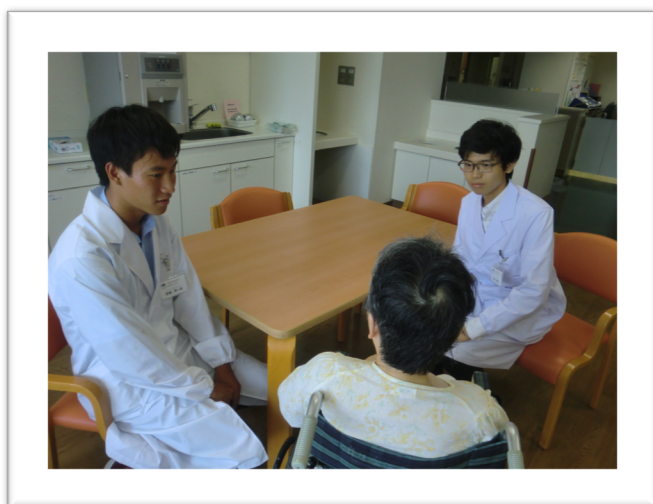
2つ目は、薬剤師の仕事の実際について体験的に理解し、自分が「こうなりたい」と思う将来像を具体的に掴むことです。

3つ目は、医師や看護師の仕事と役割について、観察やインタビューを通して学習し、複数の職種がどのように医療を支えているかを理解することです。他の医療者の役割を通して、チーム医療の中で薬剤師に期待される役割や能力とは何かを考えることも期待しています。

医療現場での実習後には、医学部医学科・人間健康科学科の学生と合同で「事後ワークショップ」を開催します。事後ワークショップでは、学生同士が実習先での体験について意見交換することで、上記3つの目的についての理解をより深めています。また、他の医療系の学生と協力してこれらの活動を行うことで、様々な職種・部署から成り立つ医療現場や製薬企業などで、建設的な議論を進めるためにはどうしたらよいのかを考え実践する第一歩にもなっています。

受け入れていただいた医療機関の皆様には、学生の教育・指導にご理解ご協力いただき心より御礼申し上げます。本誌でも紹介いたしますように、学生は実習を通じ様々なことを感じ成長することができました。引き続き、温かいご支援・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

2019年3月1日  
京都大学大学院薬学研究科長  
中山和久



## 2. 早期体験実習の目的と概要

本実習は、旧「外来患者支援ボランティア実習」を改編して2013年度から行われていたものであり、京都大学医学部医学科及び人間健康科学科、薬学部の一回生を対象としています。今年度は、医学科109名、人間健康科学科8名、薬学部38名が参加し、全国の39の病院のご協力をいただき、8・9月の一週間で実習をさせていただきました。

新・早期体験実習の目的は、次の3つにあります。

### 1. 医療者の仕事を理解する

学生は、自分が目指す医療者の仕事の実際について、シャドーイングや見学等を通して理解し、自分が目指す医療者像を具体的に掴むことを目指します。学生には、医療現場ゆえの現実の厳しさや大変さも、具体的に理解することが期待されています。

### 2. 医療における多職種連携を理解する

学生は、将来医療者として協働する他職種がどのような仕事をしているのか、どのようにしてチーム医療に取り組んでいるのかを理解することを目指します。このことを通して、自分が目指す医療者に何が求められているのかも掴むことを目指します。

### 3. 患者の視点から、医療・病院を理解する

医療ボランティア等を通して、患者とコミュニケーションをとったり、病院での様子を見ることを通して患者の視点からみた医療や病院とはどのようなものかを理解します。

これらの目的をもった実習を通して、学生には、高校生から医療専門職者の卵へと「移行」してもらうこと、すぐれた医療専門職者になるためにはどのような学習・成長が自分には求められているのかを、実感として理解してもらうこと、を期待しています。

以上の目的及び意図をもつ本実習プログラムは、次ページにあるスケジュールに沿って進められます。全員に参加を求める「事後ワークショップ」では、別々に実習していた医学科・人間健康科学科・薬学部の学生が「多職種グループ」を編成して、実習を通して得たことを共有し、上記3つの点について理解を深められるように工夫しています。



## 早期体験実習スケジュール

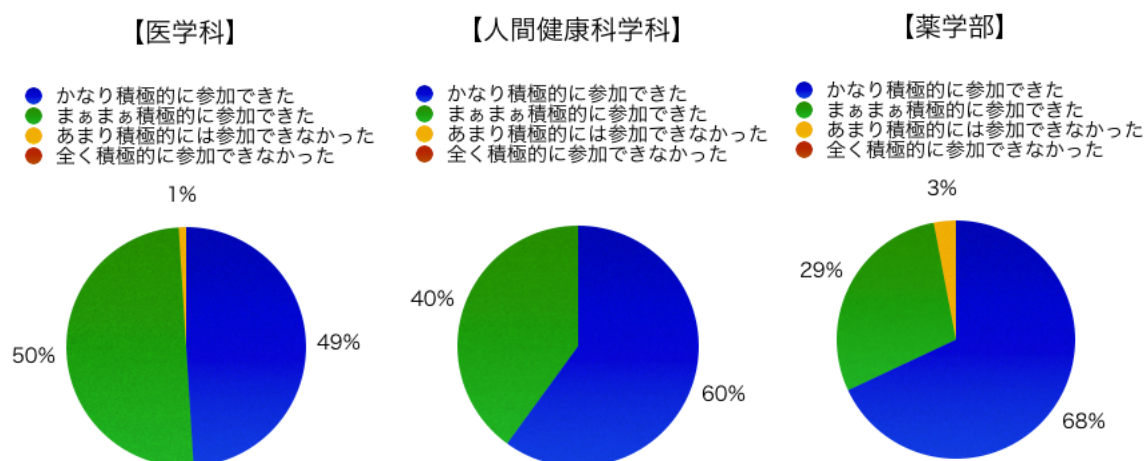
5月	第一回 事前ガイダンス (実習目的の共有、学習目標の作成)
6月	実習先の調整
7月	第二回 事前ガイダンス (事前準備と役割分担、事前勉強会の実施)
8-9月	実習の実施
9月末	事後ワークショップ <ul style="list-style-type: none"><li>• 課題レポートを持参し、グループで成果発表</li><li>• チーム医療についてのグループ・ディスカッション</li></ul>



### 3. 学生による実習プログラム評価

(2018年9月25日実施 授業評価アンケートから)

1. 病院での実習にはどのくらい積極的に参加できましたか？ またその理由（積極的に参加できた理由、できなかった理由）は何ですか？



- ✓ 初めて病院見学をするということで積極的に質問できた。(医)
- ✓ たくさん質問ができた。当初の目標だった、患者との関わり、医療者間の関わりについて意識して話をきくことができた。(医)
- ✓ 事前勉強会で何を知りたいのか具体的に決めたことで、目的意識をもって実習に取り組めたから(医)
- ✓ 気になった点をフィールドノートに書いているうちに、自分のギモンがはっきりし、先生にも質問することができました。(医)
- ✓ 多くの部門を見学させていただき、質問の時間もいただけたから。(人)
- ✓ 複数の職種の方が、実際に働いておられる所を見学させてもらえ、医療者側から病院の一部を見られたから。(薬)
- ✓ 事前にチーム医療について本やネットを活用して疑問点を用意して、実習中に様々な医療者に質問し、様々な観点の意見をもらえたから。(薬)

- ✓ 丁寧な説明のため非常に有意義な時間であった。医学知識がほとんどないため、的を射た質問ができなかった。(医)
- ✓ どの程度参加してよいのか分からず、控えめになってしまった。(医)
- ✓ 簡単なことは聞いてはいけないと思い、上手く質問を考えられなかった。(薬)

2. 実習の内容やスタッフの対応で最も、よかった（勉強になった、興味深かった）と感じたことは何でしたか？

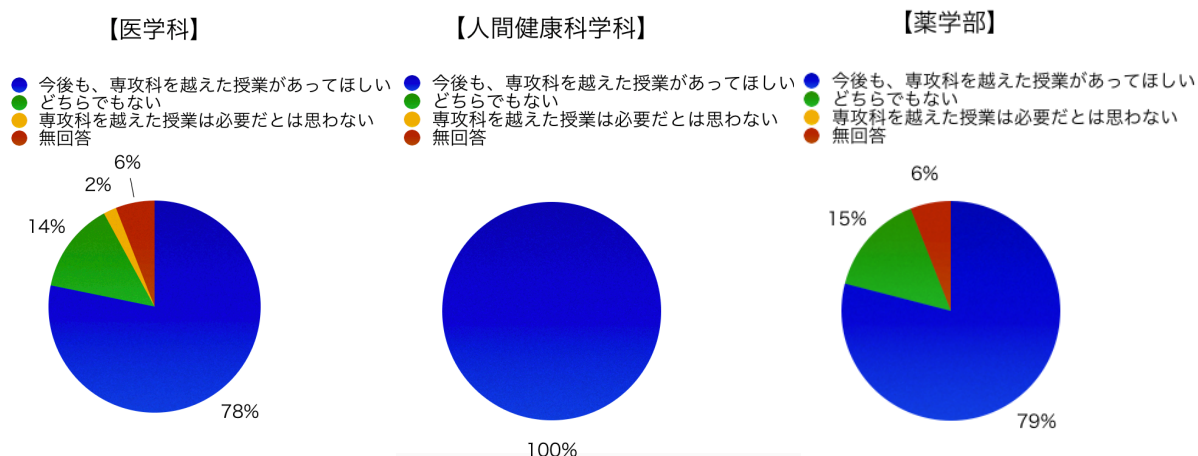
- ✓ 実際に医師の仕事を間近で見学できたこと。(医)
- ✓ 処置内容などを丁寧に教えてもらったこと。近くまで寄らせてもらったこと。(医)
- ✓ 手術室に実際に入れたこと(医)
- ✓ どのように進行するのかを適度に説明してもらえた。(医)
- ✓ 患者さんとのかわわりを、裏でも表でも見られたことです。(医)
- ✓ 医療現場の実情を教えてくださいましたこと。(医)
- ✓ 薬剤部の方が色々見学する前に短いオリエンテーション（ガイダンス）をしてくださったので、非常に分かりやすかった。(医)
- ✓ 最先端のもの（ダヴィンチ等）を見れたこと。色々な体験をできたこと。(医)
- ✓ 診察見学で、患者が出ていってから次の患者が来るまで何をしているかを知れたこと。(医)
- ✓ ただ説明するだけではなく適宜自分の考えを言うようにうながしてくれたこと。(医)
- ✓ 医師の仕事だけでなく、薬剤師、理学療法士、作業療法士の仕事内容をその現場で見ることができたこと(医)
- ✓ 医療者は患者さんの命を左右する仕事をしているのだから、一つ一つの行動にきちんと根拠を持ちなさいとおっしゃっていたこと。(医)
- ✓ "チーム医療"について初めてこんなにも真剣に考えた。(医)
- ✓ どんなことでも秘密にせず、一回生なのに何でも見せてくださった。(医)
- ✓ 手術室の様子を見学させていただいたことが印象的でした。TVのドラマで見ると実際に見るのでは、やっぱり違って、手術室の様子に対するイメージが変わりました。(人)
- ✓ 臨床検査技師のリーダーの方の仕事に対する姿勢(人)
- ✓ 外科手術の現場を何度も見学させていただくことができ良かったです。(人)
- ✓ 裏方の仕事を多く見られたのはよかった。(薬)
- ✓ 市立病院だけでなく、近くのクリニックにも見学させてもらったこと。地域密着型の医療がとても印象的でした。(薬)
- ✓ たまに雑談を交え、話しやすい雰囲気をつくってくれた。→チーム医療を構成するのに大切な要素？(薬)
- ✓ 薬剤部や病棟で複数の薬剤師の方から話が聞けたこと。(薬)
- ✓ 医師と薬剤師が、患者に最善の治療をするために勉強し続けなければならないとおっしゃっていたことが、責任感を感じられてよかった。(薬)
- ✓ 今、大学生のうちにやっておいた方がいいことを教えて下さった。(薬)

### 3. 実習内容やスタッフの対応などで、困ったこと／改善してほしいことは何ですか？

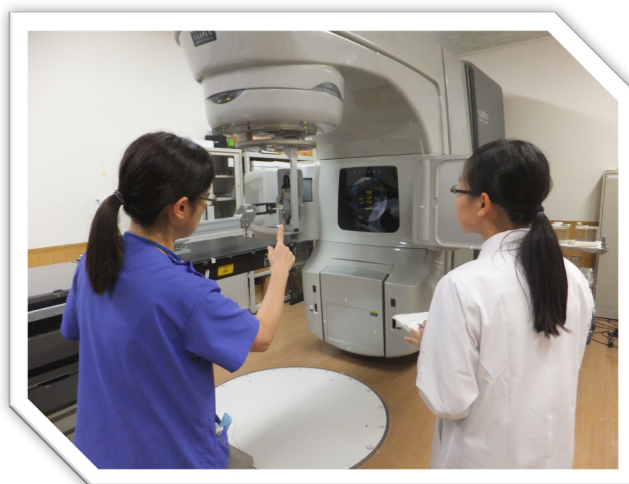
- ✓ 早期体験実習で見学に来ているという情報が届いていない時があった。(医)
- ✓ 中には、具体的にどのようなことを実習ですればよいか分からず、放置される医療者もいたこと。(医)
- ✓ あまり周りの学生たちに意見を聞かず、自分の見解について話していた。(医)
- ✓ (スタッフが) 忙しすぎて放置された。(医)
- ✓ 病院案内で何度も同じところに行った (医)
- ✓ 待ち時間が長かった (医)
- ✓ 看護師さんがあまりに忙しすぎてお話を聞けなかった。(医)
- ✓ 集合時間に来ないことが複数回あった。(人)
- ✓ 水を飲む時間がないほど予定をつめていただいたので (うれしいことですが)、気分が悪くなった。(人)
- ✓ お昼休憩の過ごし方がよく分からなかった。担当の人がだれもいらっしゃらなかった。(薬)
- ✓ こちらがあまり質問しなかったこともあるが、予定よりも早く終わってしまい、時間があまってしまったことが多かった。(薬)
- ✓ 救急外来の見学のとき、スタッフがとても忙しそうで、どこにいたらいいのかわからないときがあった (薬)
- ✓ ER で自分が邪魔になっているような気がして見学よりも邪魔にならないようにすることに気が向いてしまった。(薬)
- ✓ 何の説明もなく見学させられたとき。(お忙しいのはわかりますが…) (薬)
- ✓ やることないし、帰っていいよ、と言われたこと。(薬)



4. 今回のような異なる専攻の医療系学生との合同実習／授業についてどう思いますか？



- ✓ 医学科はたこつぼ化するから。(医)
- ✓ 他の専攻科の人の考えを聞くことができるから。(医)
- ✓ 医学科だけだと視野がせばまる(医)
- ✓ 多職種理解を深めたい(医)
- ✓ このように合同で行うと他職種への理解につながると思うから。(医)
- ✓ 視点が全く異なって刺激を得られるから(医)
- ✓ 将来のチーム医療のイメージが付きやすい(医)
- ✓ 視点の異なる人と話すのが楽しかったため。また、研究医志望の私は今回薬学部の研究者志望の人と話し、臨床医志望の人とはできない話ができただため。(医)
- ✓ 他職種の仕事への理解は必要だと思う。(人)
- ✓ 最近はチーム医療が盛んだから(薬)
- ✓ 連携は大切だから。(薬)
- ✓ 薬剤師以外の視点をもてる良い機会だから。(薬)



## 5. 学生からプログラム提供者へのメッセージ

- ✓ いつかまたこのような経験ができればいいなと思います。とてもためになる実習でした。(医)
- ✓ 医療者としてあるべき姿を考えるのに役立った。(医)
- ✓ 本実習で医学を勉強するモチベーションを高めることができました。ありがとうございました。(医)
- ✓ 最初はあやふやだったけど、病院の雰囲気や今の課題などを知ることができてよかったです。(医)
- ✓ 現場を見て、実際の課題を目の当たりにして漠然とした考えが現実的なものに形を成しつつあるかと思います。貴重な体験を有難うございました。(医)
- ✓ 何よりも自分が何年後かになるだろう職種の人たちと出会って話を聞き、医師の理想像と自覚が芽生えたと感じました。チーム医療についてもたくさん考えさせられました。(医)
- ✓ 専門的なことを学ぶ前だからこそ、感じられたようなこともあったと思う。この実習に参加できてよかったと思う。(医)
- ✓ 貴重な体験をさせて頂きました。将来の具体像が見えたのは今後役に立つと思う。(医)
- ✓ 実習の機会、またこうした意見交換の機会をくださって本当にありがとうございました。(医)
- ✓ 他の学科の人の考え方に触れられたのがよかったです。(医)
- ✓ 楽しかったです。2回生以降も機会があれば参加したいです。(人)
- ✓ 病院実習は自分が知らなかったことが多く新鮮で、とても興味深かったです。ありがとうございました。(薬)
- ✓ 1回生のうちに実際の医療現場を見る機会をえることができたのは今後の進路の決定に非常に役立つと感じた。また事後ワークショップも他学部の人視点を知ることができ有意義だった。(薬)

- ✓ 実習は大変自分にとって有意義なものでしたが、知識がなくて与えられたものを100得られなかったのが、悔しかったです。(医)
- ✓ 実習プログラムを事前に教えていただけると、事前に勉強することが出来るので、ある程度知識を持って実習に臨めると思う。(医)
- ✓ もう少し知識を持った上で実習に行ったほうが、より有意義であると思う。医学の知識について右も左も分からない状態で臨んだので、理解が不十分に終わったものがあった。時間があまり気味だった。(ワークショップ)(医)
- ✓ フィールドノートが大きすぎて、持ち歩くと怒られた(医)
- ✓ 実習、ワークショップも含め、医学科の人が多く、あまり他学科の人と話せなかったのが、残念に思いました。(医)
- ✓ 医学部生にもっと薬剤師の意義を説明しておいてください！(薬)

## 4. 学生は何を学んだか

### 1. 自分が目指す医療者について（医師）

学生は、医師としての知識や技術を身につけること、医師としての仕事の責任、患者の声や不安に耳を傾けること、患者の家族のことや退院後の患者の生活にも配慮すること、他職種の医療者との連携の重要性、適切なインフォームドコンセント、和やかなコミュニケーションの大切さ、などを感じて医師像を明確にしようとしていました。

・あらゆる人の視点を大切にしつつ、本来の医者としての視点も大切にする医療関係者になりたいと思う。最初は患者の視点だけに重きを置いていたが、五日間実習を受けることで、物事はそこまで単純にいかないということを実感した。（医）

・今回の実習でお世話になった医療者の方は皆が、患者の病に対する現在の治療だけではなく、その後の患者の生活、その患者の家族のことにまで配慮されていた。今まで漠然と考えていた単なる「思いやり」以上の精神、責任感といったものを感じることができた。（医）

・どこの科を回っている時も言われたことですが、看護師と良好な関係を築いている医師でなければならないとわかりました。手術以外の処置や患者への対応などでも看護師の助けが不可欠だったため、看護師との関係が悪いがために患者に不利益が出てはならないからです。（医）

・手術を控えた患者さんに対しては少しでも不安が和らぐように配慮していらっしやう。私はその姿を見て、その先生方のように患者さんの心に寄り添えるような医師になりたいと思った。（医）

・本実習で非常に心に残っていることがある。それはIC（インフォームドコンセント）の見学である。若い男性患者で妻と小さな子供のいる方であった。家族のためにも今死ぬわけにはいかないというその患者さんの言葉と主治医の先生を信じて治療に合意するその姿を見て、医師は患者の人生を握っており、大きな責任を伴う仕事であると身にしみて痛感した。（医）

・自分は外科に興味があるため手術の見学は非常に印象的だった。医療ドラマやドキュメンタリー番組などを通じて手術シーンは見たことがあったが、実際の手術を生で見るのは初めての体験であった。手術というとシリアスな雰囲気で行われるイメージがあったが、実際は和やかな雰囲気の中行わ

れていたのは意外だった。医師に聞くと、中には重い雰囲気で行われるものもあるが、そのように和やかに行われるものも多いらしい。コミュニケーションがよくとられていたため、医師というよりチームで手術をしていることが感じられた。(医)

・大多数の患者にとって名医というのは、話にしっかり耳を傾けることができる医師であると感じた。(医)

・実習中、先生に診療記録(カルテ)の記入の重要性を話していただいた。唯一の公的書類であり、患者側に求められたら即時提出する義務があることなどを教えてもらった。それだけでなく患者さんの言葉をきちんとメモする医師とそうでない医師があることを教えてもらい、自分が医師になったらカルテの記入にこだわりを持ちたいと思った。(医)

・私は医者だからといって患者に距離を置かれることがないよう親しみやすい話し方を心がけることにより患者に打ち解けた状態で話していただける医師になりたい。(医)

・それぞれに専門は持っていらっしゃるだろうが、専門を超えたお話でも、しっかりと患者に説明していて、このように患者の信頼を得るに足る医師になりたい、と思った。(医)

・まずはプロフェッショナルなドクターとしての確かな知識と技術を身につけていること。この基盤がないと、いくら人格が優れていても意味がないと思う。ある先生が「知識の伴わない優しさは人を傷つける。」とおっしゃっていたが、正にその通りだなと思った。(医)

・謙虚な姿勢で患者さんに敬意を持ちながら接することのできる医師であること。これは勿論単に優しいということではいけなくて、医師として厳しく言わなければならない所は譲ることなく、その上で患者さんに寄り添い、信頼される医師が理想である。(医)

・他職種の方に医師に求めることは何か、と質問することにした。すると、かえてきた答は、無駄になってしまうような指示はなるべく減らしてほしい、自分の得意分野についてはもっと相談してほしい、という二種類だった。この意見から、私は他職種の人々のことを理解し、協働をうまく行える医師になれば、医療現場の雰囲気も良くなり、より良い医療を提供できるのではないかと考える。(医)



## 2. 自分が目指す医療者（看護師・臨床検査技師）

他の医療者と連携して医療を提供できること、学び続けること、患者とのコミュニケーションや環境づくり、患者のためになることを自分で考えて実践できることなどを学生たちは大切に感じていました。

・ 検査といっても病変の知識がないと医師に適切な判断材料を送ることができないため、学習を続けることが重要であると感じた。 医師が困るくらい早く検査結果を届けたいという思いで臨床検査課のリーダーを務めている方に強く感銘を受けた。(人)

・ 私は患者さんだけでなく、他の医療者に信頼され、連携と工夫を重ねてよりよい医療を提供する医療者になりたい。(人)

・ 個性によって、医療者側に積極的にコミュニケーションをとれる患者さんもいれば、そうでない患者さんもいるということ、理解している。その上で、コミュニケーションに消極的な患者さんが、自分の気持ちを素直に話せる環境作りが出来るような、医療者を目指したい。 また、落ち着いて、全体が見渡せるようなひとになりたい。(人)

・ もし看護師になるとすれば言われたことだけをするのではなく、どうすれば患者さんのためになるか、など自分で考えて実践していかなければならないと感じた。(人)



### 3. 自分が目指す医療者について（薬剤師）

学生は薬剤師としての責務の大きさ、患者への姿勢や説明、正確さとコミュニケーション能力、高い専門性、薬剤治療におけるミスを防ぐ番人としての役割、が求められていることなどを感じていました。

・ 医師の中で「薬のことは薬剤師に聞く」という意識が徐々に広まっており、責任は重大になるが、その分仕事に対するやりがいも生まれるとおっしゃっていた。（薬）

・ 薬の調剤に関してだけでも、錠剤の一包化から粉薬や軟膏の調合、安全キャビネットでの抗がん薬の調製などがあり、また、入院患者さんの容態と薬の使用量の管理や患者さんへの薬の説明、院内医療者に向けた薬の説明会、特集記事の作成など想像以上に様々な仕事を担っていた。（薬）

・ 薬剤師には正確さとコミュニケーション能力が不可欠であると考える。調剤や製剤業務では薬剤師の調剤の後は患者の手に渡るので、仕事のミスは許されない。そのため、月、日付、曜日、1年目の薬剤師が間違えやすいこと、2年目以降の薬剤師が間違えやすいことなどで分けて、監査で見つかった誤薬数の統計をとることで、薬剤師の意識を高め誤薬数を減らす工夫がしてあった。（薬）

・ 薬剤師は薬剤治療におけるミスを防ぐ最後の番人であると感じた。（薬）

・ 「患者さんにとっての名医は頭が良い人でもなく、技術がある人でもなく、きちんと自分の話を聞いてくれる人である。」とおっしゃっていたのが印象的である。これは薬剤師にもあてはまることであり、AIなどが発達して人間よりも正確に判断できるようになるといわれている現在、これまで以上に医療者に患者とのコミュニケーションが求められているのだと感じた。（薬）

・ 各病棟にそれぞれ担当の薬剤師がついていて、入院患者さんひとりひとりとコミュニケーションを取りながら薬の内容や量などを医師の先生と相談しているのは、患者さんにとってもとても安心できることだと思ったし、薬剤師が患者さんと毎日関わり合うほど身近な存在にあることが少し意外で驚いた。（薬）

・ 入院前に現在どのような薬を飲んでいるか聞いて、これから飲む薬と一緒に飲んで大丈夫か判断するというのもしている。（薬）

・ 病院で働く薬剤師の仕事は多岐に渡っていた。例えば、薬剤師の業務として最も一般的な調剤業務の中でも抗がん剤や高カロリー輸液などは無菌調整室で無菌調剤を行い、その他の薬剤は薬剤部内で

行うなど薬剤の特性に応じた調剤方法を行っていた。また、医療用麻薬などは金庫に入れて管理するなど薬の管理方法も多様であった。薬剤に応じた様々な調剤方法や保存の仕方について熟知することが薬剤師として活躍するために重要なことだということが分かった。(薬)

・服薬指導では単に薬の説明をするだけではなく、患者さんの様態や精神状態をもしっかりと把握して、状態に応じて話しかけ方や説明の仕方などを変えていたのが印象的でした。(薬)

・かつては薬の調製が中心だった薬剤師の仕事が、電子機器の発達や医療現場で薬剤師に求められる役割の変化などにより、より専門性の高い知識を求められる仕事内容に変化していることがわかった。(薬)

・完全に患者から切り離された職種ではないことも分かった。患者に薬を処方するのは医師だが、薬剤師はその処方を監査する役目があり、薬を通じて患者と薬剤師はつながっている。また、医師や看護師から薬についての質問を受けることもあるらしい。このように、薬剤師は、他の職種を通して患者と関わっていると思った。(薬)

・事前学習で病院薬剤師の仕事について調べたとき、調剤にかなり機械の導入がすすんでいて、チーム医療に関わるようになってきていると分かった。そして、求められる能力がより対人的な能力に、求められる知識が専門性の高いものになっていると考えた。(薬)

・医師と対等の立場で患者さんのための最適な薬物療法を考えていくのが理想で、より広い視野で考えられるような知識を得ることはもちろん、薬剤については医師以上の専門性を持つ知識や情報収集能力が求められると感じた。(薬)

・優れた情報処理能力、意見を医師にしっかりと伝えるコミュニケーション能力、折れない心を持ち合わせていた。(薬)

・薬剤師がカルテをこまめに確認することで薬の配合可否などの誤りを発見することが患者を守ることにつながるということが分かりました。(薬)

#### 4. チーム医療について

チーム医療におけるコミュニケーションの大切さ、患者を中心とした医療、医師のリーダーシップと協働、分業やそれぞれの専門を活かした仕事の進め方、チーム医療と呼ばれないようなところでの連携、チームの明るい雰囲気、チーム医療の問題点などについて様々な気づきが挙げられていました。

・医師は普段一人一人の患者と接する時間がどうしても短くなりがちなので、患者に一番近い存在である看護師が様々な情報を提供していたのが、まさにチーム医療という感じがしていた。これから、さらにチーム医療が広がりを見せるなかで医師になる自分としては、コミュニケーションの重要性も感じた。(医)

・チーム医療に関しては、緩和ケアチームが印象的だった。チームの先生方が一丸となって患者さんの生きがいや喜びを見つけているということを強く感じた。(医)

・医師は医療現場で常に最大の責任を負う立場にいるが、リーダーシップをとると同様に他の医療従事者の助言を聞き入れられる余裕を持たなくてはならないと感じた。また、他職種の人と関わる機会が多いことから、様々な価値観を持った、様々な立場の人と接する機会を多くもつことが重要だと感じた。(医)

・見学で感じたのは、医療は自分が思っていた以上に分業化され、医師の担う役割は非常に限定的であるということであった。そしてどの職業においても、医師のオーダーをトップダウンで受け、ただその通りにこなすのではなく、オーダーそのものに間違いがないか、そして違和感を感じたら医師に意見をするなど、医師からのオーダー内容をしっかり考えることが求められているように感じた。(医)

・私が実習を通して学んだチーム医療とは、医療者同士の相互提携はもちろんのこと、その提携に加え、医療従事者全てが患者やその家族と意思疎通を行い、患者にとって患者が欲する最適な医療を与える医療である。(医)

・改めて、「チーム医療」という名がつかないような、患者にとっては当たり前なところでも、様々な職種の方々が携わっていることが医療現場をよりスムーズなものにしていることを感じた。(医)

・私が特に印象に残ったのは看護師の業務の患者さんへの密接感である。医師は主にチームのリーダーとして働き、実際動くのは主に看護師で、責任重大で高いスキルが必要だと感じた。また、今は機

械化が進んでいるため臨床工学技士の存在が大きいと感じた。実際、どの部署でも不具合や操作の不  
明点がでたらすぐ対応できるようそばに臨床工学技士が控えていた。(人)

・もちろん治療の方針を確定させるのは医師であり、それに従って他の医療人はそれぞれの役割を果  
たすのであるが、医師からの指示を鵜呑みにするのではなく、時間の許す限り指示内容を分析し、お  
かしいと思ったときは医師に確認を促すという、双方向的な医療人同士のつながりを垣間見たとき、  
そのことを実感した。(人)

・手術室は、静かで張り詰めた雰囲気だと思っていたけど、実際は、音楽がかかっている、術中彼ら  
全員が雑談をしていて、とても明るい雰囲気だった。お互いに信頼関係が成り立っているからだろう  
か。(人)

・病院の中だけでチームができていだけではなく、退院後のケアのために介護施設に患者の病気の状  
況について伝える資料を医師が作成していた。(人)

・チーム医療の主体は医療従事者ではなく、患者なのだということを学んで感じました。(薬)

・これまでは病院を成立させているのは医師や薬剤師や看護師などの医療者だと思っていましたが、  
医事課の方や管理課の方などが病院の経営を管理したり、病院の設備を維持したりすることで初めて  
病院が成立することを知りました。(薬)

・これからのチーム医療をよりよいものにしていくために必要だと感じたことは、医師に対してもっ  
と他の医療者が意見を言えることである。これには、二つ原因があると感じた。一つは、医者  
の地位が高い点である。医師の決定が医療方針を決めるため、医師の発言力が強くなってしまっ  
ている。他の医療者の地位をもっと高めていかねばならない。そして、もう一つは、医師が忙し  
すぎるという点である。医師が忙しすぎて他の医療者からのアドバイスを把握しきれないのでは  
ないかと感じた。多くの患者さんを助けることも大切だが、もっと一人一人じっくりと治療す  
るという考えも必要かもしれない。(薬)

## 5. 患者について

患者が不安を抱えていること、患者への説明の仕方、医療者の対応で安心すること、医師と他の医療者の前では患者の姿勢が変わること、患者の家族までケアすること、複数の疾患を抱える患者、認知症の患者、患者の病気の理解の程度など様々な気づきがありました。

- ・ 先生方の言葉や態度で、患者の様子がいかに穏やかなものになるのかがはっきりとわかった。  
(医)
- ・ 患者は何かしらの不安を抱えて来ており、医師の目を見てその不安を訴えかけていた。だからこそ医師のほうもしっかりと患者の目を見て話を聞くことが患者の信頼や安心につながると感じた。また、患者が診察室に入ってきたとき、パソコンの画面を見ているか、患者のほうを見ているかで患者からの印象がかなり違うと感じた。(医)
- ・ 外来時でも多くの患者さんは医師と対面する瞬間は萎縮しているように感じた。(医)
- ・ 薬や手術が治すのは体であって、心までは治せない。苦しんでいるのは患者だけではないのだから、その家族のケアも忘れてはならない。(医)
- ・ 不治の病を持ち 20 年以上病院に通っている女性のお母様とお話しする機会があった。お話しする中で、患者さんが医師に求めているものは、的確な治療だけでなく、どのような病気でなぜその治療が必要なのかという明確な説明であるということがわかった。(医)
- ・ 小児科では患者と医療従事者間だけではなく、患者のご家族の中でも意思疎通が非常に大切であることを学んだ。(医)
- ・ 明るくりハビリに取り組み、向こうから話しかけてくれる人や、痲癢を起こして大声を上げる人など様々ないたが、やはり余裕がない人は多く、安心感のある医療者になりたいと思った。(医)
- ・ 「患者さんとの対話には細心の配慮が必要なのだ」ということも感じた。看護師とは近所の人との世間話のように気軽に話す患者さんも、医師の話を書くときは心なしか顔が少しこわばっているように見えた。医師の話が患者さんに与える心理的影響の重大さを忘れてはいけない、と感じた。(医)
- ・ 基本的には医療者の方に全面的信頼を置かれているなと思いました。それゆえに治療がうまくいかなかった場合の失望は大きくなるのではないかと思いました。(医)

・患者の皆さん及びご家族の方々は大きな不安を抱えていらっしゃるということを強く感じた。病棟や診察室では、当然数多くの患者及びその家族をお見かけすることになったが、子供を早く病院に連れて行かなかったことを後悔する母親や、子供の病状について医師の説明を受け困惑した表情を浮かべる母親、めったにない高熱でつらいことをボランティアに話す患者など、不安が垣間見えた。

(医)

・同じ日に手術を受けて入院していた患者さん同士で、お昼ご飯の時に会話していた。その会話の中で、傷が痛んで夜上手く寝付けなかったけど、看護師さんに遠慮してしまって言えなかった、と言っていた。(人)

・入院中の患者さんが看護師さんや薬剤師さんと楽しそうに話しているのをよく見た。リラックスしていて、よい関係が築けていると思った。(人)

・今まで、病気の苦しみや、治療のつらさについては考えてみたことがあったが、検査というものを軽く考えていた。しかし、内容によっては、検査するだけでも患者に苦痛を与えてしまうこともあるのだと感じた。(薬)

・患者さんの中には自分の病気について理解している方もいれば理解しておらず治療に積極的でない方もいると分かった。(薬)

・患者さんが抱える問題は一つの病気にとどまらないという点である。高齢の患者さんが多く、それゆえいくつもの大病を患っていたり、認知症が進行していたりと患者さん一人一人に合わせた医療が求められていた。(薬)

・患者は、自分の病気について情報収集をしている。専門的な知識まで身につけ、新たな治療法について興味をもっておられた。これは患者の「生きたい」「元気になるたい」という強い意思の表れであり、医療従事者はこの思いに応えられるよう最大限の努力をしなければならないと感じた。(薬)

## 5. 医療者から学生へのメッセージ

※ 学生から提出された「医療者から学生へのメッセージ」の一部を抜粋

- ・ 患者さん、コメディカルから愛されるよい医師になってください。（医師→医学科生）
- ・ イメージとしては、「この先生なら自分の家族の命を預けられる」という医師になってほしいです。そのためになすべきことを考え、感じ、学んでいってください。（看護師→医学科生）
- ・ 医師ひとりでは医療は成り立ちません。チームでやっていることを忘れないでほしいです。（看護師長→人間健康科学科生）
- ・ 薬剤師は薬の「有効性」だけでなく「安全性」にも注視することで、患者を「副作用」から守れる唯一の職業であることを理解して下さい。（薬剤師→薬学部生）
- ・ 多職種が各々専門レベルを高める努力をされていて、医師にはわからないことも他部署と相談して解決できることがたくさんあります。（医師→人間健康科学科生）
- ・ 入院されている患者さんは誰しも病気に対しての不安があり、その不安と向き合って頑張って治療を受けています。患者さんに寄り添える優しい医師を目指してください。（看護師→医学科生）
- ・ 患者、家族の思いを聞けるようになってほしいです。（看護師→人間健康科学科生）
- ・ 病院という組織が大変多くの職種によって機能しているということを知ってもらうことを目標にプログラムを考えました。よい医療を実現するためには患者さん、スタッフとの良好な人間関係が必要です。このためにはコミュニケーション能力と想像力が重要であると思います。学生の時間のあるうちに、自分の専門以外の勉強、特に哲学、文学、宗教学、心理学などの文系の勉強をされることをお勧めします。（副院長→人間健康科学科生）
- ・ クラブを続けながら、幅広い教養を身につけてください。（院長→人間健康科学科生）
- ・ 医学部の中だけでは世間が狭くなりがちです。他学部、他大学の人もとも交流する中で、自らの器を大きくしてください。（医師→医学科生）



・医療界は多くの職種で支えられていることが、少しは感じ取れたと思います。そんな多職種をまとめるのは医師であり、チーム医療のリーダーとならなければなりません。そのためにも医療者である前に人として、社会人として当たり前の人間性、社会性を学生時代に身につけてください。(医師→医学科生)

・今持っているすごい力(真面目で誠実な態度)を持ち続けていってください。(看護師→医学科生)

・医療従事者になるために知識や技術を学ぶことはもちろんの事ですが、学生の中に色々な経験を積む事で豊かな人間性を持つことを学んで吸収してほしいです。(受付→人間健康科学科生)

・診療の実情を見て今の時代で理不尽に思ったことを忘れずに、将来どうやったら是正できるか考えていってほしい。(医師→医学科生)

・日々、医療品は開発され、新しい薬剤が市場に出ていますので薬剤についてわからないことがあれば薬剤師に相談して頂ければ良いかと思います。(薬剤師→医学科生)

・治療の中で薬の役割はどんどん重要な位置を占めて来ています。また薬剤師は病院の中でも薬剤のエキスパートとして頼りにされる存在です。研究するにせよ、臨床で薬剤師をするにせよ、頑張ってください。(医師→薬学部生)

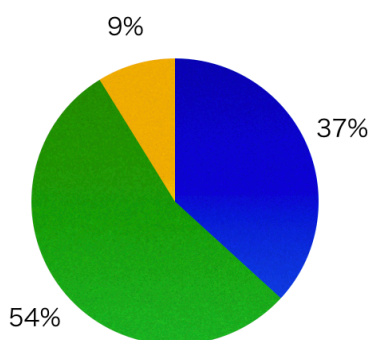
・人間健康科学科の学生さんが来られるのは今回初めてで、学科の内容についても初めて知りました。医療はもはや純粋な「医学」だけではなく、医療工学、社会学、倫理学など様々な分野に広がりをもってきています。でも最終的な目標は「患者さんのために」であることは共通しています。今回の実習があなたの目指す医療の分野での活躍にお役に立てれば嬉しいです。(副院長→人間健康科学科生)

・将来、皆様が働かれることになったとき、ボランティアさんが居る職場であれば、「ありがとう」の一言を笑顔とともにかけてあげてください。その言葉が、ボランティアさんの活力になります。(ボランティアコーディネーター→医学科生)

## 6. 受け入れ医療機関からのフィードバック

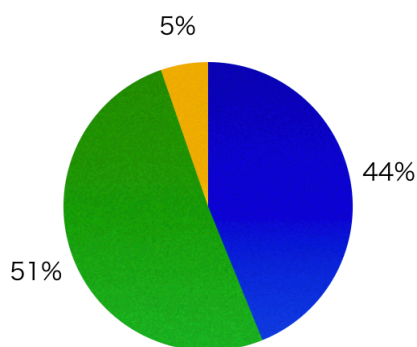
【実習の趣旨・目的】

- とても明確だった
- まあまあ明確だった
- あまり明確でなかった
- 全く明確でなかった



【学生の取り組み】

- とても積極的だった
- まあまあ積極的だった
- あまり積極的でなかった
- 全く積極的でなかった



【実習の趣旨・目的・運営について】

- ・事前に各学生の「実習目標」をいただけることはありがたかったです。
- ・昨年は実習生が実習の目標が不明確であまりやる気が無かったですが、今年は医療における多職種連携について学ぶと明確でしたので、こちらも指導がしやすかったです。(他2件)
- ・前もって学生たちも十分計画を練っていて、特に改善した方が良いと思われる点もありませんでした。
- ・素晴らしい企画で、可能な限りで、今後ともお手伝いさせていただくつもりです。(他3件)
- ・当初は医師以外の医療者の戸惑いが目立ったが、学生の熱意に押されきちんと対応していただけるようになった。
- ・初めて実際の医療に接する良い機会ですので、このままで良いと思います。(他4件)
- ・一回生という時期に実際の医療現場やそこで働く人々と関われるのはとても有意義なことだと思います。医療人として現場に出るのはまだ先だと思いますが、色々な場所や人から刺激を受け、多様性を受け入れられる人材としての成長を期待しています。(他2件)
- ・インターンシップや見学でもない、一回生という本当に初々しい一面に触れられて、当院スタッフも改めて初心を思い出すことができたように思う。(他1件)
- ・自分が学生の時もこうした実習があればよかったのにと感じます。

- ・事前に実習で何を見学したり、学びたいか簡単な内容でもいいので、知らせて頂けると、より充実した実習になると思います。(他 9 件)
- ・体験実習当日までに関連の教科書等を読んでくるなどの予習をしてからのぞむとより興味・学習意欲が上がると思います。
- ・既に取り組みられている事かとは思いますが、実習前に、改めて実習を受ける姿勢というものを指導してもらえればと思う。(他 1 件)

→学生は事前に「私の実習目標」を作成し、その実習目標に関連したテーマの自主学習、グループ学習の機会を設けておりますが、その意義を改めて説明し、事前に興味や関心を伝えられるようにいたします。学生の中でも取り組みや意識に差がどうしても生じてしまいますが、事前学習で底上げをできたらと考えております。

- ・まだ一回生ということもあって、話した内容を理解してもらえなかったかもしれません。(専門科目の講義はまだだと聞きました。) 検査室の雰囲気を知るという点では今回の早期体験の期間はとても良いと思います。(他 3 件)
- ・学生の 1 回生で、予備知識はとくにない筈ですが、吸収する能力に差を感じましたので、どこまで情報を提供するべきか、悩ましいです。
- ・1 回生であるため、説明出来ることが少なく、内容に困る声を多くいただきます。1 週間と期間も長すぎるため、何も無い時間も多々あるようです。(現場も困るが学生も困ると思うのでお互いのためにならないとのお声いただきます)(他 1 件)
- ・薬学部と医学部の方が同時に来られましたが、どちらの視点に合わせるのがいいか、悩みました。(他 1 件)

→たしかに 1 回生の段階で専門的な知識がない中での体験実習なので、お伝えできることが限られてしまうことがあると思います。様々な医療者の仕事に触れ、チーム医療について考えたり、患者のことを考える機会にできればと思っておりますが、ご無理のない範囲で説明いただければ、今は分からずともその後の学習で学生も理解を深められると思います。医学部と薬学部で学生への対応は特に変えずとも、それぞれの視点で医療現場について見学して、様々な仕事や役割を観察しながら気づきを得ていると思いますので、多職種での学びの機会としてご対応いただけたら幸いです。

- ・1 週間の最終日に学生が何を学び、何を感じたかを簡単なレポートにして現場に提出してもらえれば、彼ら自身の考えのまとめにもなりますし、医療機関側の反省にもなります。(他 1 件)

→最終日に学生に意見や感想を聞くような取り組みをしている病院もありまして、ぜひそのような取り組みもしていただいて、現場にも還元できるものがございましたら幸いです。

## 【学生の取り組みについて】

- ・とても礼儀正しく、熱心に実習されていたと思います。質問もたくさんしてくれました。(他 11 件)
- ・興味を持って熱心に説明を聞いておられました。多職種がそれぞれの専門性を活かして協働しているチーム医療の場を体験され、その大切さをはじめ、将来像を見据えた医療について学んでもらえたと思います。(他 11 件)
- ・診療見学中は患者の話に熱心に耳を傾けることができていた。コメント時にはメモを取っており積極性がうかがえた。(他 3 件)
- ・外来診療、他科コンサルテーションの診療、チーム医療、地域連携等多様な活動に参加してもらったが、積極的に興味を持って取り組んでいた。(他 2 件)
- ・真面目に過ごしておられたと思います。(他 3 件)
- ・何にでも楽しそうに興味を持って参加していただき、当方としても気持ち良かった。(他 3 件)
- ・3グループ、6人全ての方が、非常に熱心に、また礼儀正しく対応され、将来有望な学生さんたちで、お世話させていただいた職員全てが感心しておりました。(他 2 件)
- ・外来患者への対応もボランティアさん、当院スタッフからの声掛けにより、少しずつ手伝い、対応出来ていた。(他 1 件)
- ・スケジュールがしっかり埋まっているので、休憩してもよいと促したが、見学させて欲しいと熱意のある様子でした。(他 1 件)
- ・短期間に多くの部署で実習してもらいましたが、集合時刻の5分以上前に到着しており、感心しました。姿勢を正して人の話しをしっかりと聞いていることが好印象でした。
- ・有意義な時間をすごしてもらえたと思います。
- ・実習終了時には自ら薬剤部にお礼を伝えに行く姿に積極性を感じました。

- ・今回、学生によって、積極的な姿勢を感じることはできたかについては、学生によって大きく差があったのが残念であった。(他 1 名)
- ・社会的常識面でもまだ未熟と感じられました。
- ・救急外来の現場のイメージがなかなか湧かなかったようで、質問もあまりなかった。
- ・最初にどのような目的で実習をするのかとの問いに答えることができませんでした。

→まだまだ実習態度については学生によって差がありますので、事前ガイダンスや事前学習の機会を通して、実習参加に関する態度や興味関心を明確にしておくことなどは引き続き伝え続けていきます。

## 7. 事後ワークショップ

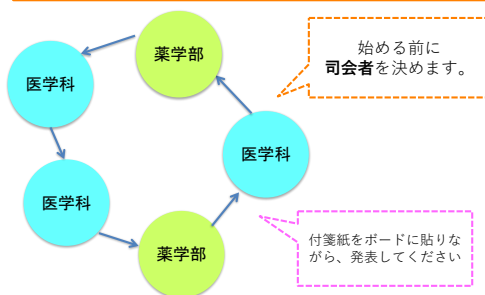
2018年9月25日に、各学生が実習成果を持ち寄ってチーム医療などについて議論する多職種ワークショップを実施しました。ご参加いただいた医療機関の皆様、誠にありがとうございました。

### <ワークショップの内容>

#### STEP ONE

学生は参加にあたって作成したレポートを見直しなが、**自分が目指す医療者/患者/チーム医療**について自分が経験したこと・学んだことのキーワードを付箋紙に書き出し、グループ内で発表します。

発表をする（1人につき5分程度）



次に、お互いの付箋紙を突き合わせて、専攻科や学生間の視点や理解の違いがどのような点に認められるかを話し合います。

#### STEP TWO

ポストイットを整理・分析する



- 出された付箋紙を整理する。
- 学生間の視点や理解の違いがどのような点に見られるかを、余白部分にメモする。

### STEP THREE

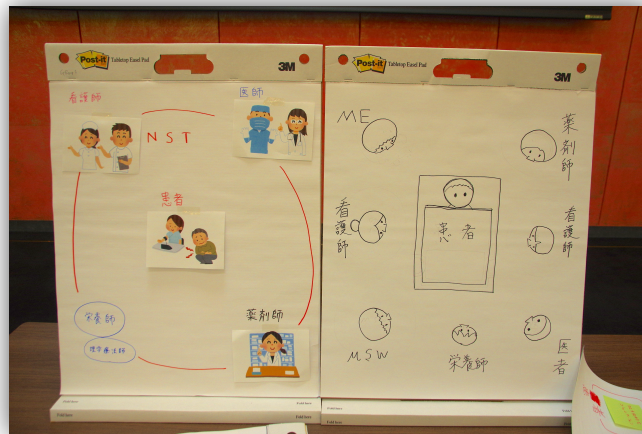
最後に、医療現場でのチーム医療の実際や課題について、具体的に経験した事例を元に話し合います。

### このワークで何をするか

- ワークIIで議論された「チーム医療」の例から一つ選択する。  
(選択基準は、最も多職種間連携が求められる場面、もしくは最も課題を感じた場面)
- まずは、その場面で患者やスタッフがどのように関わっていたかを絵や図などにして描く。
- 次に、このチーム医療を、ここにいるグループメンバーで行う場合はどうすれば良いかを話し合う。その際、各メンバーの強み・弱みをどう生かすか、生じる課題は何か、それにはどう対応するかを含める。



### <学生プロダクト>



## <参加した学生のコメント>

薬学部や人間健康の人たちの話は医学部の自分とは違った視点で気づかされるが多かった。薬学部の方が、医師と患者の架け橋としての薬剤師の役割について話しており、その人の実習先では医師に聞きづらい患者の質問や悩みを薬剤師の先生がカバーしておられたそう。また、他職種カンファレンスの重要性に関して、人間健康の方が話しており、医師をはじめとした医療人全員が互いを理解したうえでチームとして協力し合うべきだと強く感じた。

病院実習を通して、自分が患者にどのようなことができる医療者になるか、チーム医療の一員としてどのように貢献するかについて班員がそれぞれ発表した。薬学部の方が、患者に直接薬を渡す場合、出す薬が間違っていないかを最終確認する責任のある仕事であり、薬について患者に説明することも重要という話をした。また、医師が薬剤師などのコ・メディカルに対して高圧的な態度を取っている場合があるらしいという話も聞いた。私はこれまで、医師以外の医療従事者は、医師との関係の中でしか考えたことがなかったが、この話を聞いて、薬剤師や看護師と、患者との関わりについての考察が不足していることを痛感した。

他の専攻学科の方々は、医師と協力することを考えていました。医師はやはり責任を伴う中心人物になり得ることから、注意を持って医療に従事していくべきなのだと感じました。他の医師志望の方々も、医師への配慮の存在に注目していたようです。

今回の事後ワークショップでは、実習を通してわかったことのみならず、医療現場の問題点について考え、議論することでこれから医療をより良いものにしていくため、将来医療者になる私たちに求められていることについて深く考える良い機会となった。

今回の私たちのグループは、医学科4名と薬学部1名の構成でした。普段はあまりかかわりのない薬学部の方とも意見を交えながら取り組めたのは、自分にはない視点を知ることができたのでとても勉強になりました。

事後ワークショップでは自分以外の学生が実習を通して見聞きしたことを広く知ることができた。

# 付録



## 受け入れ医療機関一覧

	病院名	医学科	人間健康科学科	薬学部	計
1	金井病院	5	1	0	6
2	京都医療センター	5	0	0	5
3	京都桂病院	2	0	2	4
4	京都市立病院	3	0	3	6
5	沢井記念乳腺クリニック	1	1	0	2
6	丹後中央病院	2	0	2	4
7	日本バプテスト病院	1	0	1	2
8	洛和会音羽病院	2	0	0	2
9	医学研究所 北野病院	4	0	0	4
10	大阪赤十字病院	3	0	3	6
11	大阪府済生会茨木病院	3	0	0	3
12	大阪府済生会中津病院	3	0	3	6
13	大阪府済生会野江病院	3	1	2	6
14	関西電力病院	2	1	1	4
15	市立岸和田市民病院	1	0	1	2
16	高槻赤十字病院	1	0	1	2
17	枚方公済病院	3	2	1	6
18	神戸市立医療センター 中央市民病院	6	0	0	6
19	神戸市立医療センター 西市民病院	1	0	1	2
20	神鋼記念病院	4	0	0	4
21	豊岡病院	3	0	0	3
22	西神戸医療センター	1	0	1	2
23	姫路医療センター	3	0	0	3
24	兵庫県立尼崎総合医療センター	4	0	2	6
25	公立甲賀病院	1	1	0	2
26	滋賀県立総合病院	4	0	2	6
27	市立大津市民病院	2	0	2	4
28	市立長浜病院	2	0	0	2
29	天理よろづ相談所病院	2	0	0	2
30	大和高田市立病院	1	0	2	3
31	和歌山医療センター	3	0	1	4
32	静岡県立こども病院	4	1	1	6
33	静岡県立総合病院	5	0	1	6
34	静岡市立静岡病院	1	0	1	2
35	市立島田市民病院	3	0	3	6
36	公立小浜病院	6	0	0	6
37	福井赤十字病院	2	0	0	2
38	倉敷中央病院	5	0	1	6
39	高松赤十字病院	2	0	0	2
		<b>109</b>	<b>8</b>	<b>38</b>	<b>155</b>

## 実習例

本実習では、「医療者としての土台づくり」という点での重要性を鑑み、異なる専攻科の学生であっても、同じプログラムでの実施をお願いしております。今年度も、それぞれの医療機関の特長を活かしたプログラムをご提供いただきました。以下は、学生レポートからまとめた実習プログラムの「例」です。



	午前
月	オリエンテーション 担当医師との顔合わせ／一週間の予定決め (担当：A 医師)
火	① 医療者の仕事を知る 〇〇科 B 医師／ 薬剤部 C 薬剤師／ 〇〇科 D 看護師のシャドーイング
水	② 患者について知る 医療ボランティア
木	① 医療者の仕事を知る 救急外来
金	③ チーム医療の実際を知る リハビリテーションの見学・手伝い



### <医療ボランティアの具体例>

- 外来患者受付補助・案内
- 車いす介助（リハビリへの移送等）
- 患者図書室ボランティア
- 食事介助
- 包帯巻
- 絆創膏切り
- 入院案内セット作成
- 手話体験
- 園芸（植木・花壇整備）等

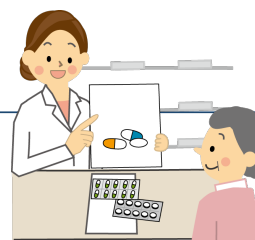
### <その他の実習>

- 在宅医療（往診）、訪問看護への同行
- 緩和ケア病棟の見学 等



午後
<p><u>オリエンテーション</u>          外来見学、手洗いガウンテクニック体験          (担当：A 医師)</p>
<p>① <u>医療者の仕事を知る</u>          ○○科 B 医師 /          薬剤部 C 薬剤師 /          ○○科 D 看護師のシャドーイング</p>
<p>② <u>患者について知る</u>          医療ボランティア</p>
<p>③ <u>チーム医療の実際を知る</u>          多職種カンファへの出席          各部署の見学</p>
<p><u>実習の振り返りとまとめ</u>          (担当：A 医師)</p>

＜部署見学例＞		
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 手術室</li> <li>• 外来診察</li> <li>• 栄養部</li> <li>• 検査室</li> <li>• 放射線</li> <li>• 地域連携室</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 医事課</li> <li>• 病棟での清潔ケア、日常ケアの見学</li> <li>• NST、ICT などのラウンドに参加</li> <li>• 血液浄化センター（透析）</li> <li>• カルテ保管室</li> <li>• 医療情報部</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 霊安室</li> <li>• 糖尿病教室</li> <li>• 病児保育施設等</li> </ul>



## 編集後記

今年度も、本学医学部及び薬学部に入学したばかりの一回生を快く受け入れ、また熱心にご指導いただきまして、誠にありがとうございました。学生にとっては、医療者を目指すにしても研究者を目指すにしても、一回生の夏の時点で臨床現場に触れることは有益な機会になっていると思います。早期体験実習を通して、医療者の役割、医療者間の連携、患者が置かれている状況などを、まだまだ未熟ながらも深めていることが伺えます。受け入れてくださる各病院の医療者・事務員・ボランティアの皆様の熱心で丁寧なご指導のおかげです。そのような現場の熱に触れるかのように、多くの学生が熱意を持って取り組んで、多くの気づきを得ておりました。一回生の授業全体を通して、一番印象に残っている授業に挙げる学生も少なくありません。

本学に入学する学生は高い学力は備えておりますが、激化する学力競争の中で「何のために医療者・研究者となるのか」「自分は何を学ぶべきか」を形成する機会に乏しい状況にあります。自分が志す現場の人・場に触れることで、どのように学ぶか、どのような医療者・研究者を目指すか、これからの学生生活をどのように過ごしていくかを考えるきっかけになると捉えています。学生が実習を通して気づいたことのメモを見ても、事後ワークショップでの対話を聞いても、チーム医療やコミュニケーションの大切さ、専門的な知識や技術を身につけることの重要性への気づきがたくさん伺えます。何の知識・技術もない一回生を受け入れることは大変なご負担であるとは存じておりますが、他には代えがたい学びの機会との認識から引き続きご協力いただけましたら幸いです。

本年度からまた人間健康科学科の学生が参加し、様々な観点からの議論がオリエンテーションやワークショップ等でもされていました。多職種で学ぶこと、自分と専門が異なる者と共に学ぶ機会は将来の協働のためにも重要な機会と捉えており、今後も継続してそのような場をつくり、なおかつ皆様からのフィードバックをもとに発展させていけたらと思っております。引き続きどうぞよろしく願いいたします。

2019年3月1日

京都大学医学教育・国際化推進センター

京都大学医学部人間健康科学科

京都大学大学院薬学研究科



